

□海外文献紹介□

自己拡張型メタルステントを用いた悪性食道閉塞治療の試み

Self-expanding metal stents for palliation of malignant esophageal obstruction—A pilot study of eight patients: *Bethge N, et al* (Endoscopy 24: 411-415, 1992)

食道および食道胃接合部の進行癌は予後不良の疾患であり、切除不能例の治療の目的は狭窄症状の緩和にある。この治療法に関しては①手術療法、②(内照射を含む)放射線療法、③レーザー療法、④化学療法、⑤内視鏡プロステシス・プジー、⑥以上の組み合わせなどが試みられているが、いずれも安全性・コスト・患者に与える苦痛と有用性を考慮した場合、必ずしも有効と言えないのが現状である。

そこで今回著者らは、悪性新生物による嚥下障害の治療に、新たに提案された自己拡張型のメタルステントを臨床応用し、その有用性を検討

した。対象は8例の手術不能症例(男女比7:1, 平均年齢64歳, 平均腫瘍長径6.4 cm)で, 14 mm Wallstent (拡張前後の長さ: 15, 9.3 cm, 径: 9Fr)を使用した。前処置として鎮静剤を使用後, 0.035 inch ガイドワイヤー沿いに外筒フードに覆われたステントを病変の遠位側へ内視鏡的に挿入し, 外筒を抜去することによりステントを拡張させた。全例特記すべき偶発症もなく治療を完了した。

治療直後の効果は, 嚥下困難度を grade 0: 正常, 1: 固形物に, 2: 軟らかい固形物に, 3: 流動物に嚥下困難, 4: 唾液嚥下不可の5段階に分け評価したところ, 治療後は 0.5 ± 0.5 (mean $\pm$ SD, 以下同じ)と, 治療前の 3.1 ± 0.35 に比し著明な改善が認められた ($p < 0.0005$)。5例(62.5%)は普通食を摂取することができた。また, 6例(75%)は経口摂取のみで十分なカロリー補給が可能だったが, 残りの2例(25%)には経

皮的胃瘻(PEG)から栄養を追加した。平均経過観察期間 10.7 ± 2.0 週ののうち2例(25%)に症状の再現を認めた。1例はステントメッシュ内の腫瘍発育が原因で, PEGを造設した。また, 1例にはステント装着部近位側の腫瘍増殖がみられたため, レーザー治療を追加した。3例はステント留置3か月後もなお嚥下障害の訴えなく生存している。経過観察期間中の累積内視鏡検査回数は 2.2 ± 2 回であった。

以上より自己拡張型のメタルステントを用いた拡張療法は, 他の治療法に比べて極めて安全かつ速効性で, しかも十分な症状緩和効果を有する治療法と考えられたが, 長期間留置によるトラブルの発生は通常のプロステシスチューブと差を認めないもので, 安全性・長期有用性の観点から更に優れた器材の開発が必要であろう。

(愛知県がんセンター消化器内科

鈴木 隆史 抄)